

シリーズ「グローバル・ジャスティス」

第52回「高里鈴代さんと『基地の町に生きる』を観る」

第一部：ドキュメンタリー上映

『基地の町に生きる (*Living Along The Fenceline*)』(リナ・ホシノ監督、2011年、67分)

第二部：トークセッション

発言：高里鈴代氏

(基地・軍隊を許さない行動する女たちの会共同代表、沖縄強姦救援センター (REICO) 代表)

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第52回目にあたる本ワークショップは、同志社大学フェミニスト・ジェンダー・セクシュアリティ研究センター (2015年7月1日発足) との記念すべき第一回共催イベントとして開催された (後援に「女性・戦争・人権」学会)。

当日はドキュメンタリー『基地の町に生きる』上映の後に、沖縄からお招きした高里鈴代氏のトークセッションを設ける二部構成で進められた。なお、高里氏は「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」の設立メンバーとして、本ドキュメンタリーが生き生きと描き出す人々のネットワークの活動を現在進行形で引き受ける一人でもある。

翌日に安保法制の衆院特別委員会での審議を控え、その強行採決も予想される緊迫感がフロアからの質問発題にも反映する状況の中、顕在化する軍事主義を包囲し、それに抗するネットワークの可能性が切実に問われる場となった。

ところで『基地の町に生きる』は、本ワークショップに限らず、既に多くの場所で上映されている。DVDの構成を見ても、撮影地域毎にチャプターが割られ、複数言語での字幕が付与されているように、様々なシチュエーションで上映されることがあらかじめ想定されていることがわかる。高里氏が強調するように、このドキュメンタリー自体、上映される過程の中で拡大していくネットワークの中にあらかじめ置かれているのである。

ドキュメンタリーの主題も、やはりネットワークの生成過程それ自体にある。そこに映し出されるのはグローバルに展開される米国軍事戦略の鳥瞰図においては「戦略的位置」としてのみ了解され、その声を奪われた地域の現実である。サンアントニオ (米・テキサス州)、ビエケス (プエルトリコ)、ハワイ、グアム、沖縄、韓国、フィリピン。しかし、それは基地被害に苦しむ地域の個別事例集ではない。地域毎に区切られたチャプターはそれぞれ、基地があるがために引き起こされる被害の凄惨さを克明に映し出すが、その焦点はむしろ、基地のある地域に生きる人々が、抗うべき状況を自ら見定めていくプロセスの方に絞り込まれている。その結果、チャプターを跨いで浮かび上がるのは、軍事的暴力に対峙する人々の越境的なネットワークである。こうして生成するネットワークにおいては、地域の分断を利用した基地の配置転換を「負担軽減」と呼んで誤魔化すような、米軍再編に特有のレトリックが入り込む余地はない。

ともあれ、ドキュメンタリーの捉えた越境的なネットワークの生成の端緒を台無しにし

ないためにも、抗うべき状況が「女性の視点」から語はじめられた点に、注意しておく必要がある。女性たちの経験を共有することから出発したネットワークは、その経験を自らの根拠として領有しようとするマッチョな政治が語る連帯とは、やはり違う。反基地運動における連帯とは、かつて反基地運動の立場からも聞かれたような「安保の問題を女の問題に矮小化するな」といった主張によって、すぐさま基地撤去要求を唱和することではない。本ドキュメンタリーが描き出すネットワークは、そのような唱和の中ではかき消されてしまうような問題の所在をも明らかにしている。

たとえば、チャプターが沖縄へと移った時、そこで語り出されたのは、被害者を被害者として認定する司法制度、そして沖縄社会の性規範の中でも作動する性暴力の問題である。性暴力の被害者であるというのならば、落ち度のないことを証明してみろという暗黙の（あるいはあからさまな）恫喝は、同時に基地の街で働く女性にも向けられている。1995年の米兵による少女暴行事件に対して真っ先に応答した高里氏が、一貫してその活動の中心に据えてきたのは、そのようなセクシズムを軍事主義との不可分な関係において問題化し、それによって分断される女性たちの経験を同時に捉える視点であった。

ネットワークの越境的な拡大は、軍事主義に抗するという共通の目的において人々が出会う過程であると同時に、それぞれが直面する異なった状況の中で、その連帯を維持するという困難なプロセスでもある。しかし高里氏自身は、そのことに絶望しているようには見えない。それは高里氏にとっての運動が、共通の利害を維持することである以上に、むしろ、容易には解消し難い亀裂をむしろ積極的に問いとして再設定しながら、議論の場を創出し続ける営みとして語られていることによるのかもしれない。脱軍事化を担うネットワークとは、本ワークショップがその一部でもあったように、絶えず議論の場を作り出し、新たに連結させることで生成する、人々の関係性のことなのだろう。

(文責：古波藏契)